掲載日：2023年05月24日，面名：教育，記事ID：KIJ20230524_A0017000102601001
(C) 十勝毎日新聞社

固定観念離れ教育を相対化

研究は面白い！ ―⑲

大学教員に聞く

北海道武蔵女子短期大学 明田川知美准教授（45）

北海道武蔵女子短期大学教養学科の明田川知美准教授の専門は教育学・教育行政学。一方で、自身は中高生時代に勉強への興味が持てず「自分に自信もなかった」と語る。なぜ教育学の研究を志すようになったのか、自身の経験が研究にどう影響したのか、話を聞いた。

（聞き手・安藤有紀）

―中高生時代を振り返って。

本は好きだったものの勉強は全くしない中学生だった。5段階評価の通知表に2だけが並んでいたことも。高校でのテストの点数もひどく、自分はバカで勉強ができないと思い込んでいた。でも、担任の英語の先生が「やればできる」と何度も言ってくださったおかげで英語だけは頑張ろうと思い、そこから少し意識が変わり短大へ進学した。

教育への関心は、小学生の時に本で英国のサマーヒルスクールを知ったのが最初。自由で柔軟なカリキュラムに驚き、当時自分が受けている教育・学校が当たり前ではないと思うようになった。

1994年、愛知県の男子中学生がいじめを苦に自殺した事件に大きな衝撃を受けた。短大の先生方との出会いもあり、学力を伸ばすことにはあまり興味はなかったが、学校で生きづらさを感じている子どもや公教育制度について考える学問に関心があり、教員養成を主たる目的としない北大の教育学部に編入した。

―出産を経て30歳で復学した。

子育て中は研究から離れていたが、子どもを預けていた保育園で大きな事故が起き、子どもの安全や保育園のリスクマネジメントに関心が向いた。教育をもう一度学び直したいと復学、その後は子どもの成長とともに研究のテーマも広がってきた。

子どもが不登校になった経験から、不登校の研究にものめり込んだ。どんなに知識があっても、子どもの不登校に直面すると親はパニックに陥ってしまう。大事なのは孤立しないこと。親にはアドバイザーではなく共感者が必要なのだと分かり、共感し合える人たちで話せる場をつくろうと不登校の子どもを持つ親の会「ポレポレ」を立ち上げた。

―専門分野の魅力は。

私自身「勉強が好き」という感覚を持ったことがあまりないが、関心のあることを調べる、社会の中で「これはおかしい」と思ったことを突き詰めるのはとても楽しく、人生も豊かになると感じる。学校に行かねばならないという観点から離れ、「子ども・教員・国家のそれぞれにとって学校とはどんな場所なのか」などと、学校や教育を相対化して考えられるのが教育学の最大の魅力。

―中高生へメッセージを。

今は先行き不透明な時代で、将来は誰にも予測できない。その中で「何歳で何をしなくてはいけない」と決めるのはナンセンス。浪人や休学などのブランクは人生の無駄でも何でもない。「30歳くらいまでにやりたい方向に進めていればいいな」という程度に、長く広い視点で柔軟に考えてほしい。先生や親の言葉をうのみにせず、自分で考えて決めてもらいたい。

大学や専門学校に受験の年齢制限はなく、高卒認定試験や社会人留学制度もある。不登校の子どもや親は将来を考えて不安が募ってしまうが、「何歳でも大学に通える」「いつでも進路変更できる」と考えてもらえたらいいと思う。

◇　◇

大学には、人生を懸けて日夜、研究に打ち込む研究者がいる。彼らの、中高生に向けたメッセージを紹介する。

高校の調査や視察も行う。旭川工業高ではエンジン解体を体験

あけたがわ・ともみ　1977年札幌市生まれ。北星学園女子短大英文科、北海道大学教育学部卒。同大大学院在学中に結婚、３人の子どもの出産のため退学・再入学・休学・復学を経て博士前期課程修了、後期課程単位取得退学。数々の専門学校講師や大学の非常勤講師などを経験し2020年より現職。